MATSUMURA Hiroyuki

松村　浩之

富山大学芸術文化学部講師

実感を伴う人体表現

私は絵のモチーフとして人間を選んだ。人間の力、生命力を表現したいと考えたからだ。自画像に誇張・強調した筋肉を加えて描いたのが私の作品だ。

私が筋肉にこだわりをもちつづけている理由は、幼少期にあこがれた漫画のヒーローやプロレスラーに始まり、古代ギリシア彫刻などからインスピレーションを受け、肉体の強さは精神の強さに比例すると考えたためだ。

もちろん自分が強い人間だと思っているわけではない。むしろ弱さを自覚しているからこそ、強くなりたいという想いを筋肉に込めて制作している。

肉体的にも精神的にも強くなりたい。それが人間としての目標であり、その過程で描いた作品が自身や他者を少しでも勇気づけることが画家としての目標だ。

精神と肉体の関係性を考える上で特に注目している作品は、蛇と戦う《ラオコーン》だ。

蛇を抑える腕の緊張感や、大きくねじれた上半身によって迫力のあるポーズを創り出している。死の直前を表現した像のため、顔の表情は死の苦悩を表現しているが、体の方は、蛇より太い上腕をもった強大な筋肉が表現されており、本当に死ぬ運命にあるのかと疑ってしまうほど生き生きとした彫像となっている。

ケネス・クラークは右腕を挙げたポーズを苦痛の象徴[i]だと述べているが、空手をやっている私の目から見れば、蛇を力強い腕で抑え込んでおき、そこに手刀かひじ打ちを落とそうとしているかのようにみえてしまう。

『ギリシア美術模倣論』の中でヴィンケルマンが「彼の痛苦は我々の肺腑に沁み入る。が我々はこの偉大な人間と共にその痛苦を堪え通そうと願うであろう」[ii]と述べているように私もこの彫像から精神と肉体の力の拮抗を感じ取った。

ラオコーン自体に英雄性を感じ取った研究者もいることから、ラオコーンは、外敵と戦う英雄としてだけでなく、自己の内部にある苦悩とも戦う様を表現しており、観る者を勇気づけたのではないかと考えられる。 筋肉の激しい動きや盛り上がりにより、苦痛の激しさを表現するとともに苦悩に耐える力をも表現したと言えるのではないだろうか。

この作品の考察から、精神と肉体の力の一致する瞬間が表現できることを知るとともに、筋肉の動きによって精神の動きを表現するという一つの方法を見出したのである。

最近は、自らがやっている空手の動きを用いた作品を制作し始めた。空手などの武道は、精神と肉体を共に鍛えるため、私の求めるものが分かりやすく表現できると考えたからだ。

武道の武という字は矛を止めると書く。つまり、武道は人を攻撃することを主体とするのではなく、守ること、有事に備えることを目的としていることが分かる。また、空手の型も必ず受けの動作から始まる。試合の際にもまずお互いに礼をし、終了後には礼をし、握手をして健闘をたたえ合う。勝敗を超えた謙虚な気持ちを持つという、日本独自の文化を忘れてはならないと思っている。

また、今はインターネット全盛の時代だ。だからこそ実感を伴うことの重要性を感じている。実際に運動不足との声もよく耳にする。体を動かすこと、手で触れることの大切さを再確認しなくてはならないと感じている。

私の絵を見た人が、自らの心と体にもう一度目を向けるきっかけとなれば幸いと思い制作を続けている。

1978年　山口県生まれ
2000年　高知大学教育学部特別教科（美術・工芸）教員養成課程卒業
2012年　多摩美術大学大学院美術研究科博士後期課程修了

2000年　独立展に出品（以後毎年、'07独立賞）
2001年　個展（銀座スルガ台画廊、'03、'04、'06、'09、'10）
2002年　上野の森美術館大賞展　優秀賞
2004年　多摩秀作美術展　大賞

2005年　昭和会展招待出品（～'09）
2008年　損保ジャパン美術財団選抜奨励展
2010年　前田寛治大賞展
2011年　収蔵作品展Ⅱ新収蔵品大展示（佐久市立近代美術館）
2012年　多摩美術大学博士課程展2012（多摩美術大学美術館）
個展（日本橋三越本店、'17）

現在　独立美術協会会員、美術解剖学会会員

作品名：黙想
制作年：2017年
大きさ：F200号
技　法：油彩
概　要：板敷の道場の中で、正座し黙想することよって自らの心と体を鎮め、心の内に問いかけている様を描いた。道場の中は現実にある非現実の空間である。直接打撃を交換するという非現実の行為に入るために黙想はスイッチの役割を果たす。次の瞬間には激しく動き出す肉体を描くことによって引き出される緊張感を描きだした。

---

i　ケネス・クラーク、高階秀爾・佐々木英也(訳)『ザ・ヌード』、ちくま学芸文庫、2004年、p.361
ii　ヴィンケルマン、澤柳大五郎(訳)『ギリシア美術模倣論』、座右宝刊行会、1976年、p.36